

THE GALLERY

もくじ ■特集|展示室からの逸脱——ニューアートシーン・イン・いわきシリーズを考える
■企画展|「クレパス画名作展 近代の巨匠から現代の作家まで」「ニューアートシーン・イン・いわき 森口美樹展 —明日の約束—」
「古代エジプト美術館展」 ■常設展示室から ■学芸員ノート ■今後の展覧会

特集|special issue

展示室からの逸脱——ニューアートシーン・イン・いわきシリーズを考える



「ニューアートシーン・イン・いわき 吉田重信 無量の光」 1991年 いわき市立美術館ロビー 撮影:上遠野良夫
赤、青、黄色の三色のカラーテープを2階ロビーのガラス面と天窗に貼り付け、カラーテープを透過した光は三原色として館内に降り注ぐ。その光は、快晴であれば明瞭に壁や床面に姿を現し、雲が差し掛かると突然消え去り、曇天の場合には微かに認められる。大気の変動や太陽の位置の変化と連動しながら光が揺れ動き、展示空間は刻々と変容する。

1984年4月28日にいわき市立美術館は開館した。当時を振り返ってみると当初からこの美術館の若い学芸員たちは、展示室から飛び出す展示を試みてきたように思える。その理由は展示室が狭いからではない。いや、そもそもその頃は、比較すべき地方美術館も少なく、展示室の狭隘さを今ほど意識することはなかったはずだ。要は、展

示室という枠組みから逸脱する思考と行為に、美術館における展示の可能性を見出していたのであろう。

そしてそのことに意図的に取り組んだ試みが、開館翌年に開催された「砂へ、そして砂から もうひとつの美術館《解体をめぐる…》」(1985年4月6日～21日)に他ならない。美術館という制度への



「ニューアートシーン・イン・いわき 安藤栄作」 1992年
いわき市立美術館1階ロビー 撮影:上遠野良夫

異議申し立てとしてこの展覧会を企画した南島宏(注1)は、ジャンルを超えた5人の作家に対し、作品を生み出す場として美術館の建築空間と対峙することを求めた。それゆえ必然的に作品は展示室に限定されることなく館内の様々な空間の中で制作・設置され、そして筆者を含む同僚の学芸員たちも館内各所で作家と共に展示に取り組み、展示現場での彼らの振舞いを目の当りにするという得難い経験を有することになったのである。

さらに戦後から約半世紀という時を経て、あらためて戦後美術を問う企画として、いち早く戦争画を採り上げ高い評価を得た「戦争の刻印と鎮魂 戦後美術の現像展」(1988年7月30日～8月28日)もまた、美術館という場が作品を作り出す生々しい現場であることを痛感させる展覧会であった。なかでも出品作家の一人である殿敷侃が、展示現場で事前に構想していたインスタレーション・プラン — 美術館前庭の桶を廃棄物で取り囲む — を大幅に変更し、美術館正面入り口を遮るように高さ2m、長さ20mにわたって廃棄物を積み上げた行為は忘れ難い。急遽積み上げられた大量の廃棄物(建築廃材、廃車、古タイヤ等)は、広島に生まれ幼少期に被爆した殿敷にとって戦禍を覚醒させる焼け跡の瓦礫であり、また侵犯を拒む反権力の象徴ともいべきバリケードとして戦後美術に刻み込まれてきた戦争の傷跡(刻印)を問う企画を掲げた美術館の正面に配置されたのである。

同展を企画し、自ら廃棄物を積み上げる作業に加わった小泉晋弥(注2)は、後に当時を振り返り、「筆者は、このとき以来、吉田重信と共に現代美術が作り出される場に足を踏み入れたと自覚している」(「而二不二:吉田重信の作品と『茶の本』』『虹華展図録』、発行:吉田重信、2018年3月、p.13)と述懐している。この一文に記される吉田重信は、当館の開館前後から活動を始めた市内在住の作家であり、小泉の依頼を受け殿敷の助手として展示に関わったことを契機に、作家として次なる一歩を踏み出したわけである。そして吉田は、後にニューアートシーン・イン・いわきシリーズにおいて最初に採り上げ



「ニューアートシーン・イン・いわき 山本伸樹一水に浮かぶ星一」 2004年
いわき市立美術館1階ロビー 撮影:上遠野良夫

られる作家となる。

ニューアートシーン・イン・いわきシリーズは、1991年から始まる。企画を立ち上げた理由は、なによりも開館以降、市内の若い作家たちの作品を発表する機会がほとんど無かったことにつきて。そのことを踏まえ館内で協議した結果、毎年、市内在住の若手作家を個展形式で採り上げ、開催する場所は1階ロビー、観覧料も無料とし、作家、作品を紹介するパンフレット(テキスト、展覧会歴は英訳付)を制作することになった。候補作家については、学芸員各自が推薦した後、学芸会議で決定され、企画は作家を推薦した学芸員が担当するというシステムで毎年1～2回開催され、2023年4月25日から始まる「森口美樹展—明日の約束—」を含めると、小規模ながらこれまで都合49人の作家の個展を開催してきたことになる。

あらためて開催の意義を問うならば、この企画展シリーズは、採り上げられた殆どの作家にとっておそらく公立美術館における初めての個展として彼らの次なるステップアップを導く一助となる試みであり、作品を見ることを目的として仕立てられた展示空間(展示室)から逸脱する場所(1階ロビー)における展示を通して、美術館という場が作品を作り出す生々しい現場であることを実感し、身をもって経験することにあると筆者は考える。またそれゆえ前段で述べた草創期の二つの企画展に連なる試みとも言えるのではなかろうか(注3)。

そして最初に採り上げられた吉田が行った展示は、まさにニューアートシーン・イン・いわきシリーズという企画展のコンセプトと発表の場となるロビーにおける展示の可能性を、市内外の作家たちに知らしめるに十分の内容であったと思われる。1980年代後半に事故車や点滴壺を用いたアッサンプラージュを制作していた吉田は、1991年に開催された第1回目のニューアートシーン・イン・いわきシリーズにおいて初めて太陽光を扱うインスタレーションに着手する。それは彼を呪縛してきたモノ(事故車等)や表現行為(アッサン



「ニューアートシーン・イン・いわき 竹内公太展 浜の向こう」 2022年
いわき芸術文化交流館アリオス小劇場

ブルーージュ)からの脱却であり、その展示は、外光の差し込むロビーにおいてこそ可能であったのである。そして同展を期に吉田は、国内外の美術館において揺れ動く太陽の光の受容と還元を通して始原の光を顕現させるインスタレーションと虹のワークショップを展開していく。本稿ではその後に続く作家たちを述べる紙数の余裕はないが、1993年に開催された「峰丘展」と「王新平展」から若手作家と市内在住作家という枠組みを取り払い、より幅広い観点から候補作家が選ばれることを付け加えておきたい。

また展示室からの逸脱という観点から注目すべき試みとして、昨年開催された「竹内公太展」の展示を紹介したい。竹内は、老朽化と東日本大震災による影響のため取り壊されることになった市内の古い映画館「三函座」(明治後期建築)の解体現場を撮影した映像と、現

実にその映像を見ている来館者のリアルな姿を、かつて三函座で用いられていた銀幕のスクリーンの上で重ね合わせるインスタレーション作品《三函座の解体》を発表する場として、美術館に隣接する劇場(いわき芸術文化交流館アリオス小劇場)を選んだのである。

この趣向は、企画者である植田玲子によれば「鑑賞者は炭鉱都市の賑わいの象徴ともいえる映画館の終焉の姿を見つつ、自身もその現場の立会人として作品の一部となる」(植田玲子による作品解説『ニューアートシーン・イン・いわき 竹内公太展 浜の向こうパンフレット』, 2022年)ことを目論む展示として行われたが、展示場となる現実の劇場空間のなかで来館者は、これ以上の展示空間は望み得ないことを実感したのではなかろうか。

そしてまもなく開催される49回目の個展に登場する森口美樹は、大学在学中、当時教員を務めていた南畷の薫陶を受け、作家としての道を歩んでいる。南畷が起こしたアクションに繋がる企画の場において彼女がどのような作品展示を行うか期待したい。

(特任学芸員 平野明彦)

注1) 美術評論家の南畷宏は、筑波大学卒業後、いわき市立美術館学芸員、広島市現代美術館学芸員、さらに熊本市現代美術館館長を務めた後、女子美術大学教授として活躍、惜しくも2016年脳梗塞により死去した。享年58。「もうひとつの美術館」は、いけば花作家を含む先鋭的な現代美術作家5人のインスタレーションを館内各所に設置し注目を集めた。

注2) 茨城大学名誉教授の小泉晋弥は、南畷と同時期にいわき市立美術館学芸員として活躍。その後郡山市立美術館に移り、1996年から茨城大学教育学部助教授となり、岡倉天心及び近代彫刻史、鑑賞教育研究、現代美術に対する研究と評論を行っている。

注3) ニューアートシーン・イン・いわきシリーズを企画化する背景の一つとして、筆者を含む当時の学芸員たちが、この二つの企画展の展示を通して制作現場としての美術館というイメージを共有していたことを挙げるべきであろう。

企画展 | クレパス画名作展 近代の巨匠から現代の作家まで 4月15日(土)~6月4日(日)



鴻池朋子《Little Wild Things》 2015年 サクラアートミュージアム蔵

クレパスは、大正14(1925)年に日本で誕生した描画材料です。クレヨンとパステルの特性を兼ね備えたクレパスは、着

色性が良く伸展性に優れているうえ混色も自在で、油絵具に近い表現が可能です。油絵具の入手が困難だった戦中・戦後には多くの画家たちが注目する画材となり、やがてその持ち味を生かしたオリジナリティあふれる作品が生まれました。

本展は、サクラアートミュージアム(大阪)のコレクションによって構成されるもので、クレパスの開発と普及に関わった画家山本鼎をはじめ、梅原龍三郎や小磯良平、岡本太郎など、大正・昭和期の巨匠たちから現代の作家に至るまで、幅広い顔ぶれによるクレパス画の名品を展示します。クレパスならではのテクニックを駆使した個性豊かな作品を通じて、描画材料としてのクレパスの可能性を再認識することができるでしょう。

企画展 | ニューアートシーン・イン・いわき 森口美樹展 —明日の約束—

4月25日(火)～6月4日(日)



《双子の男の子(蝶々、森)》 2023年
アクリル彩・パネルに紙 作家蔵

いわきとゆかりのある現代作家を紹介する企画展「ニューアートシーン・イン・いわき」の49回目として、森口美樹の作品を展示します。森口は1990年福島県双葉郡に生まれ、2013年に女子美術大学を卒業するとグループ展や個展で作品を発表するほか、いわき芸術文化交流館アリオスの定期刊行物「アリオスペーパー」の2022年度の表紙制作を担当するなどいわきを拠点に活動しています。

東日本大震災を経験した森口は被災地を取り巻く状況や言説、あるいは日常会話のなかで本来違いないはずの人間どうしが被災者／非被災者の二元論で語られることに疑問を抱き、そうした人と人との線引きをどうすれば解消できるかを制作のなかで模索します。本展は「明日の約束」と題して、森口の絵画作品を森口自身が紡ぐ言葉とともに展示します。誰もが等しく持つ「明日の約束」を胸に、やわらかく、どこか懐かしい気持ちを喚起させる森口の世界をお楽しみください。

企画展 | 古代エジプト美術館展

6月24日(土)～8月20日(日)



《王とアトゥム神のレリーフ》 第3中間期・第22王朝

東京渋谷に日本唯一の古代エジプト専門美術館があることをご存知でしょうか？ 本展は、その「古代エジプト美術館 渋谷」の収蔵品を館外で大規模に公開する初めての展覧会です。知る人ぞ知る同館のコレクションは、中近東の古美術の収集家として知られる石黒孝次郎氏をはじめとする著名な所蔵家たちの旧蔵品がベースになっており、国内において質量ともに第一級の内容を誇っています。本展では、ミイラや



《ミイラマスク》 ブトレマイオス朝時代

ミイラマスク、木棺、神殿の柱、ツタンカーメンの指輪といった世界的に貴重な遺物や、当時の生活様式がわかる容器や装身具など約200点を4章に分けて展示します。また、過去100年間学術的な調査がほとんどなされてこなかったメイドゥム(マイドゥーム)・ピラミッドの最新調査(2022年)の様子もあわせて紹介し、古代の巨大文明に幅広く触れる機会とします。

常設展示室から



アンディ・ウォーホル《16のジャッキーの肖像》 1964年
アクリル彩、エナメル、シルクスクリン・カンヴァス 204.8×164.0cm
©2023 The Andy Warhol Foundation for the Visual Arts, Inc./ARS, NY & JASPAR, Tokyo E5150

令和5年度前期常設展では、「ポップの遺伝子:大衆性と美術」と題して、美術におけるポップ性、大衆性をテーマにコレクションを紹介します。第二次世界大戦後、戦場となることを免れたアメリカでは、大量生産、大量消費に支えられた経済成長の中で、大衆文化が醸成されていました。1960年代初頭になると、芸術家たちは大衆文化への反応として既製品や大衆的なイメージを用いるようになります。著名人の写真や既製品のパッケージを反復したアンディ・ウォーホル、看板職人から美術家に転向したジェームズ・ローゼンクイスト、コミックなどのイメージを印刷製版時の網点を用いて表現したロイ・リクテンスタイン。世界を席巻することになる「ポップアート」が誕生したのです。同様に大衆文化の醸成していた西ヨーロッパでもポップアートが隆盛し、イギリスではリチャード・ハミルトンを先駆的存在として、デイヴィッド・ホックニーらが登場します。また、1960年代アメリカでウォーホルらとともに作品を発表していた草間彌生、ダン



草間彌生《最後の晩餐》 1981年 布、いす、机 115.0×340.0×260.0cm

ボールや廃材を素材としたオートバイシリーズを発表した篠原有司男、陶にシルクスクリンを転写し、印刷物やゴミを写實的に表現する三島喜美代ら、ポップの遺伝子は日本でも萌芽し、発展していました。本展では所蔵作品より、彼ら名だたるポップアーティストや、関連する作家を紹介します。

昨今の美術においても、SNS(Social Networking Service)や情報技術の発展により、目まぐるしく変遷する大衆文化を反映した、新しい表現が生まれ続けています。しかし、「大衆性」というものが表現するに値するという価値観は、ポップアートなくして生まれえなかったことかもしれません。「ポップの遺伝子」を、当館のコレクションで迎ってみませんか？

小企画では素描・版画セレクションと題して、前半は海外作家の作品を中心に、後半は、令和4年度に新収蔵された浜田知明らの作品を、既収蔵作品と共に紹介します。

(学芸員 徳永祐樹)

前期 4/18(火)～10/15(日)

ポップの遺伝子:大衆性と美術

小企画Ⅰ 4/18(火)～7/17(月・祝)

素描・版画セレクション:海外作家を中心に

小企画Ⅱ 7/19(水)～10/15(日)

素描・版画セレクション:新収蔵作品を中心に

学芸員ノート | これは何につかうものでしょう？



図1:これは何につかうものでしょう？

図1の白色で長四角の形、そして厚みがあって柔らかそうなものは何に使うものだと思いますか？

サイズは縦30cm×横90cm×厚み3cm。一般の家庭では全く使われませんが、似たようなものならほとんどの人が毎晩お世話になっています。美術館ニュースの学芸員ノートで取り上げられているので、美術館や博物館で使う特別なものだろうと察しがつくかもしれません。私たち学芸員は、これを「綿布団(めんぶとん)」と呼んでいます。

そうです、皆さんが一日の疲れをとり、よい夢を見るために、あの寝具と同じ名前。こちらはサイズが小さいので人間がその上で寝たり掛けたりはできません。その代わりに図2のように大切な美術品(主に立体作品)を優しく包み込んだり、美術

品を箱に入れる際にできる隙間を埋めてあげたりと、私たち人間が布団で快適さを味わうように、美術品を移動時の振動や衝撃から守り、美術品が快適に移動・保存されるようにするためのものです。

素材は、中性の白薄葉紙(しろすようし)と綿(わた)、テープ。薄葉紙とは、身近なところで、新しい靴を買うと靴の中に入ってくる薄くて白い紙。柔らかくてサラサラして肌触りがよいのが特徴です。この特徴が大切で直接触れて美術品を傷つけることはありません。そして、もう一つ、「綿」。これは木綿100%の綿を使います。ナイロン綿は復元力が強すぎるので余計な力を美術品に加えてしまいますが、木綿は復元力が適度なためほどよく包むことができるのです。

作り方は、とてもシンプル。2重にした薄葉紙で綿を包みテープで留めるだけ。テープが着いていない面を美術品と直接触れるようにします。

簡単な作りですが、「綿布団」は美術品を守るためには必要不可欠。重要な役割を果たす優れたものです。



図2:保護のために綿布団で包まれた状態の頭像

(普及係長 江尻英貴)

今後の主な展覧会のご案内 (新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、中止や延期、または内容等に変更が生じる場合があります)

企画展

クレバス画名作展 近代の巨匠から現代の作家まで

4月15日(土)～6月4日(日)

ニューアートシーン・イン・いわき 森口美樹展 一明日の約束—

4月25日(火)～6月4日(日)

古代エジプト美術館展

6月24日(土)～8月20日(日)

常設展前期

ポップの遺伝子:大衆性と美術

4月18日(火)～10月15日(日)

小企画Ⅰ 素描・版画セレクション:海外作家を中心に

4月18日(火)～7月17日(月・祝)

小企画Ⅱ 素描・版画セレクション:新収蔵作品を中心に

7月19日(水)～10月15日(日)